

来所するため、その中で預かりを行うことは変則的な例となり、他の親子と共存することの難しさがある。また、ひろばのスタッフが預かりを行うことは、他の親子との関係、サポーターやボランティアとの関係等スタッフとしても「立場上のとまどいを感じている」という意見もあった。

また、ファミリー・サポート事業や近隣園で実施されている一時保育との連携も課題となっている。サポーターが預かっている子どもをひろばに連れて来る、といった例もあるようだ。

その他の課題として、けがをしたときなどの責任の所在について、などがあげられた。

・預ける親側の理由について

先に述べたように、親のリフレッシュのためなど、緊急の場合以外の理由での預かりについては、預かることに対しての意見が分かれている。

実際、一時預かりを行っている施設においても、「リフレッシュ目的での利用は少ない」という回答がいくつかあった。親が楽をするために子どもを預けることに対して、親は罪悪感を持ちやすい。

預ける理由は問うべきなのか、理由の基準をどこに置くべきなのかについて十分検討し、必要があるがゆえに預かっていることを職員間でも共通意識として持つておく必要があるだろう。

預ける理由によっては保育時間も違って来る。「少しの時間預かって欲しい」ときに気軽に利用できるような受け入れ態勢が求められているのではないだろうか。

・安心して預けられる場所に

日常的に家庭で過ごすことが多い子どもにとって、親と分離され、初めての場所で知らない人に預けられるのは心理的負担が大きい。

「子どもが場所やスタッフに慣れている場合」、「預かる前に少しでも通ってもらう」など、預けられる子どもへの配慮

も必要である。

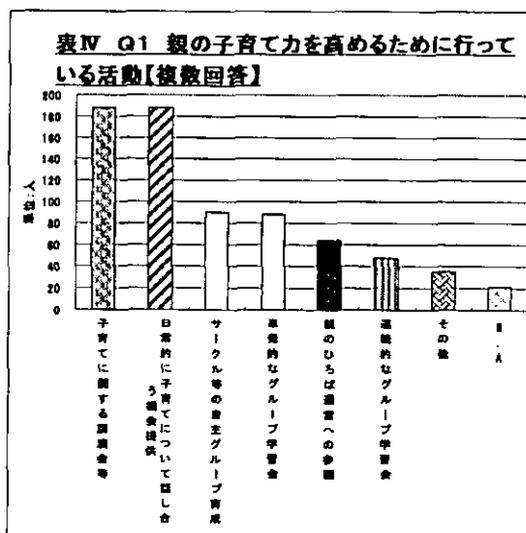
いつも遊んでいる場所、いつものスタッフがいることは子どもにとっても親にとっても安心して預けられる場所になる。

(3)親の子育て力を高める

ひろばで行っている活動の中で、親の子育て力を高めるために行っている活動について、内容を具体的にあげてもらった。そして、今後必要と思われる活動とそれを行う上での課題について自由記述による回答を求めた。

①親の子育て力を高めるために行っている活動について

実施している活動の形態は、「子育てに関する講演会等」194件、「日常的に子育てについて話し合う機会提供」192件、がほぼ同値で最も多く、次いで「サークル等の自主グループ育成」95件、「単発的なグループ学習会（座談会）」92件とほぼ同値、続いて「親のひろば運営への参画」68件、「連続的なグループ学習会（座談会）」50件（複数回答）の順であった（表Ⅳ Q1参照）。



活動の具体的なテーマは、「遊び」「食事」「トイレ」「しつけ」「生活リズム」「こころの育ち」「ことば」「絵本」「おもちゃ作り」「事故の予防と応急手当」「ほめ方・しかり方」「親子のコミュニケーション」「ともだち関係」「健診」「虫歯・歯の磨き方」などであった。テーマについては、「日常の親との会話の中から親のニーズを拾って決めている」という声が多く聞かれた。また、「連続的なグループ学習会」については、子どもの体調等に左右されやすいため連続して参加することが難しいという声が多かった。

②それぞれの施設にあるリソースを活かして

保育所グループでは、保育所ならではの様々なリソースが活かされた活動が行われていた。

一番大きなリソースと言えるのが保育所で行われている「日常の保育」。たくさんの園児と一緒に参加することによって、いろんな子どもを見ることができる。年齢に合わせた遊びや活動を知る機会にもなり、給食を一緒に食べることで食事の目安を知るなどの他、行事を利用して参加の機会をつくったり、身体測定をきっかけに育児相談を受けたり、と保育に参加することで自然に親が学ぶ機会になっている。

また、講座等については、「保育士」が講師となって保育所で楽しんでいる遊びを一緒に体験したり、「栄養士」による食事についての講座、「看護師」による健康についての講座、「園医」による講座など、保育所に元々ある人材も活用されている。

その他、「父母会」に呼びかけて、「警察、医師等の専門職の現場での事例を踏まえての父親としての子育て観を語ってもらう」、「小児科看護師の経験がある親を中心に子どもの病気やけが等についてみんなで話し合う」など親が講師となつての講座も行われている。

親を活かした講演会等は、保育所グループだけに限らず、ひろば関係グループ

でも行われている。施設内のリソースの他にも、地域の「消防署」と協力して講座を開いたり、「民生・児童委員」や近隣の「学校の教諭」による活動、「地域の高齢者」に郷土料理等の文化を伝えてもらうなど、地域にもたくさんの様々なリソースがあることがわかった。

③親のエンパワーメント

・親が育つ場として

現在実際に行われている活動は、「子育てに関する講演会等」が最も多く、専門家を講師に招いての講演会も比較的多かったが、課題について問う設問では講師による一方的な講演会形式のものについては見直しが必要であるという声が多く聞かれた。

支援者側が提供するだけのものでは親が受身になる。親が主体的に参加していくことが子育て力を高めることにつながるのではないだろうか。そのために、親が主体になれる機会としての活動が必要である。講座の形式についても、親同士が自由に話し合える形が望ましいとされている。

また、親同士の仲間作りも子育て力を高めるために必要であるようだ。子育て中に生じる様々な問題や悩みを親という同じ立場で共有しあい、気軽に話し合える仲間がいることは、親として共に育ちあうことにつながる。そして、仲間ができることによって、我が子だけでなくみんな子どもを見守り、育てあう姿も生まれてくる。

親同士の仲間作りとして、「サークル等の自主グループ支援」が有効であるようだ。サークル等自主グループで活動することは、仲間作りのきっかけ、自発的な力を発揮する機会になっている。

その他、ひろば運営に参画することも親の自らの力になっていくのではないだろうか。

しかしながら、子育てにおける基本的な知識を得るための講座等も、特に新米ママやプレママには必要であるようだ。

カナダの親教育プログラムのための参考書である『ノーバディーズ・パーフェクト』が、「毎月発行している通信に抜粋を掲載」、「『ノーバディーズ・パーフェクト』を使って講師を交えた座談会」、「『ノーバディーズ・パーフェクト』を基本としたグループ懇談会」などのように活用されている。

・孤立している母親へのアプローチ

「来て欲しいと思う人になかなか来てもらえない」という現状があるようだ。

来て欲しい人に来てもらえるような活動の例として、「『どう元気?』と声をかけるきっかけに、衣服のリサイクルなど、日常の何気ない積み重ね」といったものがあった。

「町や市から個人宛にお誘いの手紙が出せたら」という声もあった。

また、保健相談所等他機関との連携も有効であると考えられる。

なかなか来られない人がやっとの思いで来所したときに、安心して居られる場所であることは次につなげるためにも大切なことである。「いつでも安心して行ける場」、「居場所」となるためには、いつでも気軽に行ける場所であること、いつものスタッフがいることが必要となる。そのためにも専任のスタッフを置き、信頼関係を築いていくことができる環境にしておきたい。

・父親への呼びかけ

母親と父親が親として共に育ちあうことも大切なことである。

子育てを母親だけのものとせず、父親も一緒に子育てできるように、父親のひろばへの参加も呼びかけたい。

出産前には保健相談所で行われている両親学級等があり、両親で参加する機会が持てるが、子どもが生まれてからは、家庭においても“授乳するのは母親の役割”になってしまったり、父親の出番がなくなりがちである。そうなると、自然と徐々に育児から遠ざかってしまう。

父親としてできるかかわりを身につけ、共に子育てを担っていけるよう、子どもが生まれてからも父親が積極的に参加できる機会をつくっていくことが必要である。

父親が活動に参加しやすいよう、「働き方を見直す必要がある」という声もあった。

・地域ぐるみで

地域にある様々なリソースを活かし、親の子育て力を高めることにつなげていくためには、地域全体で子育て支援に取り組む、いろんな人とつながり、世代間の交流を深めていくことが必要である。

しかし、地域の連帯意識は薄れており、人々のつながりは「もはや自然にできるわけではない」。そこにおいて、ひろばが地域の交流を深める役割を担うことができるのではないだろうか。ひろばが核となり、地域の人々が集う場所をつくり、スタッフはコーディネーターとして存在する。

地域全体で取り組むことで、就園前だけでなく、学童期、思春期を通じて子育て家庭を見守ることができる。

地域の人材を活かし、子育て家庭との交流を深める活動として、ファミリー・サポート事業も有効である。

・次世代育成

多くの施設で、「親になるもっと以前から子どもとふれあう機会が必要」とされており、今後の課題としてあげられている。

小中学生が自由に出入りできる施設では、「乳幼児とふれあう機会が自然とできている」といったところもあるが、このような交流を持つことができている施設はまだ少数のようである。

親になって初めて我が子である乳幼児と関わるのではなく、もっと以前から子どもと関わり、子どもへの理解を深めることが必要である。

親になるまでの自らの生活や遊びの体

験が親となったときの力になる。これから子育てを担う人々を育てるために、子どもと関わる機会を積極的につくっていかなければならない。

次世代育成は、様々な世代が集い、地域の交流の場となるひろばの役目でもある。積極的にすすめていきたい活動である。

④支援者の役割

子育てにおける問題や悩みを、ひろばの中で相談したり、親自身がリフレッシュすることで、親は自己肯定感を得、子育てに向き合うことができる。

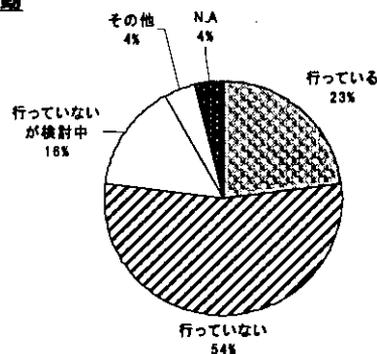
さらに、親が自分の力を発揮して積極的に子育てを担っていくためには、支援者として、“寄り添う”という態度からもう一步踏み込んで、親が主体的に活動できるように支援していくことが必要なのではないだろうか。

ひろばという“集える場”を提供し、親自身が持っている力を引き出せるよう、そこに集う人々をコーディネートしていくことが支援者の役割だと考える。そのような支援者であるために、職員間での学習会等の研修を行うなど、専門性を高めるよう努めていかなければならない。

(4)父親支援

父親がひろばに参加するために意図的に活動を行っているかどうか、支援者に向けてアンケートを行った。結果、半数以上が、特別な活動を行っていないという現状がみられ、支援を行っている、もしくは行っていないが検討中のところは4割程度であることがわかった(表V Q2参照)。

表V Q2 父親がひろばに参加するための意図的な活動



続いて、「行っている、もしくは行っていないが検討中」の支援者に対しては「父親支援を行う上での課題や難しさ」を、「行っていない」支援者に対しては「父親支援を行っていない理由と課題」を自由記述によって回答を求めた。

①父親支援を行っているひろばの課題と難しさ

・活動の日時とスタッフ体制

父親が参加できるような活動を行う中で、希望者が少ないとの回答が多く見られた。その理由として、活動の日時が平日の昼間になってしまうことがあげられ、スタッフ体制の関係で土日人数を確保するのが困難であるという課題があるようだ。また父親の立場をよく理解できるスタッフや講師の確保も難しいと述べられた。

・母子家庭への気遣い

参加者を募集する上で、母子家庭への気遣いがあるとの回答も多く見られた。支援者側に父親だけを誘うことの躊躇や遠慮があり、無理なく誘うことの難しさ、楽しかったことの伝えにくさが述べられた。それに関して、父親に限定するのではなく、子どもと一緒に参加するのであれば、母親でも父親でも祖父母でも構わないといったような窓口を拡げることも

一案として示唆された。

- ・参加者の偏り

父親向けの活動に参加する人が固定されているという現状や、参加する父親に偏りがあるとの回答が見られた。また、参加している父親は家庭でも育児をしっかきしているのではという矛盾も指摘された。

②父親支援を行っていない理由と課題

- ・スタッフ体制

父親へ対する支援を行うためには、平日ではなく土日に関所する必要があると考えているため、人材等の経費の問題で無理があるとの声が多く聞かれた。また、母親との関係作りに精一杯で、父親支援まで手が回らず、意図的に取り組むほどの時間的・人的余裕が無いとのことだった。

- ・父親限定ではない

支援の対象を母親、父親、など分けて考えず、「子どもを育てる人」と広く考えている支援者が多く見られた。そのように考えている支援者のひろばでは、自然に母親以外の祖父母や父親が参加しており、「父親支援」というように構えて支援を行っているわけではないようだ。母子家庭があったり父子家庭があったり、それぞれの家庭事情が異なるため、様々な人が参加できるような支援を意識していくことから始めているようだ。

- ・プログラム内容の吟味

実際に父親向けのプログラムを行ってみて、あまり手ごたえが得られずに止めてしまったというところもあった。その反省として、プログラム内容の選び方の問題があげられた。土日は家族だけで考える家庭にとっては、家庭ではできないような内容のプログラムなどを設定することが必要であるとの課題があげられた。

- ・企業体制への問題提起

社会全体の企業や産業の仕組みから考えなくてはいけないので難しい、企業が子育てに興味をもち、積極的に休みを取らせてほしいとの意見が得られた。

③父親支援の実践活動例

- ・一緒に遊ぼう

以下のように、様々なアイデアで父親の参加を促している例があげられた。また、一度行くと、それを見た他の母親が父親を誘ってくることもあり、連鎖的につながっていく様子も伺えた。

(例) おもちゃアドバイザーと一緒に遊ぶ中で子育てのコツ、遊び方をアドバイスしていただく。幼児体育講師を迎え一緒にふれあい運動遊びを楽しむ。ミニ運動会・クリスマス、バーベキュー、なべパーティーなどの行事。男の料理教室、心肺蘇生法学習会、パパママバンドへの参加募集……など。

- ・子育てを学ぼう

子育てについて学ぶ機会を父親に提供しているところがあった。父親グループと母親グループに分けてグループワークを行ったり、“ノーバディーズパーフェクト”の講座を行ったり、夫婦だけで参加できるように託児が付いている講座など、形は様々だ。その他、子育て中の父親同士での座談会や、ベビーマッサージなどを行い、その間、母親対象にリラックスタイムを設けているところもあった。

- ・日常的なアピール

父親がひろばに遊びに来ても孤立しないように、こちらから話しかけるといった、日常的な関わりの活動を大切にしている支援者も多かった。父親が育児に参加することで母親の育児負担が軽くなることを父親に知ってもらうためにも、積極的に声をかけ、広報などで父親と子どもとの関わりをアピールしているようだ。

・環境作り

なるべく父親が参加しやすいように、環境作りに努めているところもあった。例えば、スタッフの夫に子どもと一緒に来てもらったり、男性スタッフに企画・運営をしてもらったり、ひろばにいる男性の数を増やす努力をしている。

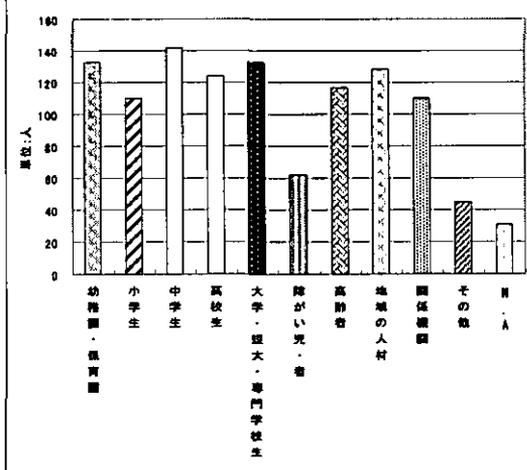
・プレパパへの働きかけ

父親になる前、“プレパパ”への働きかけの実践報告もいくつか見られた。父親のマタニティ教室や、妊娠中の母親の勉強会への参加を促したり、プレパパママスクールとしてペアでの参加を促し、先輩パパママからの体験談を聞いたり、実際の赤ちゃんを抱っこしたり、一日保育士体験をしてもらったりする中で、父親になる準備をするきっかけ作りをしているところがあった。

(5)地域交流 異世代交流

支援者に対して、交流を行っている対象者について回答を求めた。結果、100人以上の支援者が、「幼稚園・保育園」「小学生」「中学生」「高校生」「大学・短大・専門学校生」「高齢者」「地域の人材」「関係機関」と交流を持っていることがわかった。中でも、もっとも交流が多かったのは、「中学生」であり、親になる前の世代との交流が活発に行われているようだ。一方で、「障がい児・者」との交流は60人程度であることから、今後の交流の活発化が期待される（表VI Q1参照）。

表VI Q1 地域交流活動の対象【複数回答】



次に、地域交流活動を行う上で、どのような課題があるかを自由記述により回答を求めた。

結果、地域の交流活動を実践する中で、「安全面・守秘の問題」「継続性」「内部協力の必要性」「事前打ち合わせの大切さ」「PR・広報活動」という課題が提示された。

①安全面・守秘の問題

交流の回数が増えていく中で、受け入れられる人数の問題が出てきているという記述が多くみられた。小学生など1クラス40人近くの生徒が6クラス連続で来る場合などもあり、双方の安全面の問題が出てくる。交流活動を積極的に行っていくたいが、大勢の人が出入りをする中で安全を確保するには、施設の広さや支援者の数が必要になるであろうと指摘された。

また、守秘の問題として、DVケースなどで逃げてきている場合など、子どもが在園していることを園外の人にあまり知られたくない場合もあり、その際は細心の注意を払わなければならないとの記述もいくつか見られた。

②継続性

単なるイベントのみで終わらず、いかに長く続けられ地域の中に根が下ろせる

かが課題としてあげられた。そのためにも、年間を通しての計画が大切であり、受付の窓口となるスタッフが固定することが大切であるようだ。ただし、窓口となる担当者が移動などで替わることで、振り出しに戻ってしまったりすることが考えられるために、引継ぎやシェアの問題を考えていく必要がある。

③内部協力の必要性

日常の保育園の仕事に支障が出てきてしまうことも考えられるため、全職員の意識を共通にし、園児の保護者への理解を求めていくことの必要性が述べられた。また、情報を共有するための連絡などきめ細やかさも求められている。

④事前打ち合わせの大切さ

相互の目的を明確化していくことが大切であり、特に教師と保育士など、子どもの捉え方が違う場合は、共通意識が必要であると述べられた。また、消極的な（やらされている）態度や受験目的のボランティアなど、関心や興味が弱い参加者に対しての働きかけとして、事前の打ち合わせの大切さ・マニュアル作りも必要ではないかとの意見があった。場合によってはコーディネーターの必要性もあるのではないかとの提案もあげられた。

⑤PR・広報活動

子育て支援センターとはどんなところか、また地域交流の大切さについて広めていくことの必要性が述べられた。

文部科学省、厚生労働省と二分化され、されに地域行政が高齢者、社会福祉協議会、児童福祉と縦割りで分断されているという根深い問題もあることから、まずは問題提起から始めていきたいという意欲も述べられた。

⑥実際の活動例

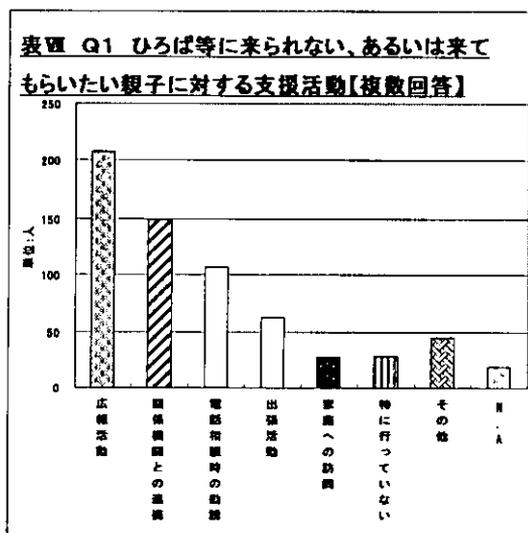
・地域の高齢者の協力と関心が高いため、年に6回ほどの交流を持ち、お互いが喜び認め合える交流の場になっている。

- ・地域のお母さんが夏にプールを利用できたりする。
- ・学校の体験学習の場となっている。
- ・不登校の子が喜んで体験学習に参加し、園児と生き生きと接しているのを見ると、積極的に行いたいという思いが強くなる。園児にとってもマンツーマンで甘えることができることは大事な機会となっている。

このように、地域交流活動が活発化しており、様々な人が子どもと触れ合うことで生きる喜びになったり、育児の経験の機会になっているようだ。逆に、乳幼児にとっても、人との出会いから、感謝と喜びを学ぶ機会となっている様子が報告された。

(6)アウトリーチ

ひろば等に来られない、あるいは来てもらいたい親子に対してどのような支援活動を行っているかについて回答を求めた。結果、「広報活動」がもっとも多く、「関係機関との連携」や「電話相談時の勧誘」が続いた。「出張活動」は60人程度、「家庭への訪問」を行っている支援者は少なく30人程度であり、「特に行っていない」という支援者も30人あった(表VII Q1参照)。



次に、ひろば等に来られない、あるいは来てもらいたい親子に対する支援活動について、自由記述により回答を求めた。結果、多くの支援者が「子育て支援の一番の課題」と意識していることが分かった。しかし、現状として、支援者の人材の確保、本当に支援を必要している人の把握、どこまで踏み込んでよいのかなどの問題があり、なかなか取り組めない、「一番大切で、一番難しい課題」であるようだ。

ひろばに来ることができる親子は、健康的で前向きであり、虐待やネグレクト家庭、病弱な人、障がい児を育てる家庭、両親との葛藤で出かけることができない人、遠くて来られない親子などへの支援を、どのように行っていくかが切実な問題として捉えられていた。

具体的にどのように対応していくか、の課題としてあげられたのは、「他機関との連携」、「PR・広報活動」、「門戸を広げる」、「意識の啓発」である。

また、最後に「実際の活動例」として、実際に行われているアウトリーチ活動についてをまとめた。

①他機関との連携

支援者のみの対応では限りがあるので、保健センターや児童相談所、区や市の児童委員や民生委員、子育て支援担当課、健康推進課、福祉事務所、学校や医療（特に産婦人科）との連携が必要であると考えられている。たとえば、保健師と一緒に家庭訪問を行うことや、健診に参加することで、ひろばに来ることができない親子にアプローチできるという意見が多く見られた。

このような連携をスムーズにするためにも、支援活動のネットワークの作成が急務であると述べられている。

②PR・広報活動

区や市の広報での情報の公開のほか、大型スーパーでのポスターの掲示、外で出会う親子に声をかけるなど、支援活動

を様々な人に知ってもらうためのPRが必要であるという意見が多く出された。また、ひろば等に来ている親子に、気になる親子がいたら声をかけてもらうように話をすることで、様々な人を巻き込む活動も身近な第一歩ではないかと述べられていた。

ただし、PR・広報活動をすることで、支援を求めてくる人が増え、支援者の負担が大きくなることが懸念されるため、人材や財源の確保も求められていることが分かった。

③門戸を広げる

支援が必要と思われる親子の中には、積極的に人と関わることを拒む人が多いという現状があるようだ。そのため、ひとりで参加できる形や、あまり人と接触せずに参加できるような形など、様々なプログラムが求められている。

たとえば、音楽や造形など一人でも参加できるもの、育児講座や育児相談など、人と関わりがもてるものとそうでないものなど、幅広い活動の中から自分が参加しやすいものを選択できるプログラムの内容作りが必要であることが課題としてあげられた。

④意識の啓発

親になる前段階での“育ち”についても考えを拡げ、そういった視点で教育や家庭のあり方を見直す時期にきているという意見が述べられた。人の発達を段階的に考えて、早い時期からの予防の視点が大切であり、小・中・高校時代からの意識の啓発が提言された。

⑤実際の活動例

“迎える”姿勢だけでなく“出向く”活動をということをキーワードに、様々な実践の報告がなされている。

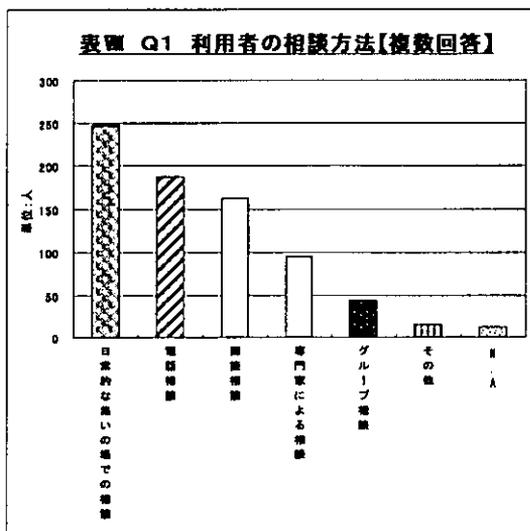
たとえば、公民館などに出かけて交流会や相談活動を行ったり、あおぞら保育の出前を行ったり、公園や神社で声をかけてエプロンシアターを行ったり、近隣

の公園などで親子に話しかけ、子育ての状況を聞いて情報を収集したりと、積極的な活動があげられた。また、外国人が外に出られない現状に対して、外国語の支援パンフレットの作成依頼を区に依頼したり、母子手帳の中に保育園やひろばの情報を入れてほしいと市に依頼をしたりと、見えないところでの働きかけを実践している支援者も見られた。その他、保健士と共に家庭訪問をし、子どもと一緒に遊んだり母親の話を聴くことから始め、元気になったら支援センターに来てほしいと誘いをかけている例もあった。また、地域部会のケース会議に取り上げてもらい、各関係機関のどこかで親子がつながっていけるように配慮をするなどといった、コーディネートの役割を果たしている支援者も見られた。

(7)ひろばでの相談活動

ひろばでの相談活動について、どのような方法で相談を行っているか回答を求めた。

結果、「日常的な集いの場での相談」が最も多く、次いで「電話相談」「面接相談」「専門家による相談」「グループ相談」と続いた(表Ⅷ Q1参照)。



次に、相談を行う上で課題と感じていることは何かを自由記述によって回答を

求めた。結果、「気軽な相談」、「深刻な相談」、「他機関との連携」、「最近の相談の傾向」、「電話相談」の5つの分野での課題が述べられた。

①気軽な相談

深刻な相談ではなく「自分の子育てが間違っていないか」の確認など、気軽な相談を必要としている人が多くみられることから、簡単に集える、足を運べるひろばが必要であるという意見が多く見られた。

それほど悩まなくてもよいことでも、話す相手がいないために深い悩みになってしまうことがある。たった一言で安心できることなどに関しては、遊びの中でのリラックス状態で話をできることが重要であるようだ。相談するということは、特別に悩んでいるときに行うと考えられやすいが、生活の中で話をすることが発散になり、心のゆとりにつながっていくと考えられ、ひろばでの関わりの大切さが述べられた。

②深刻な相談

一方で、深刻な相談の場合に、ゆっくり話せるような場所が確保しづらい、守秘されにくいという環境面が指摘され、遊び場から隔離された相談室が必要とされていることが伺えた。また相談を受ける側のスキルとして、押し付けや強制ではなくて相手をそのまま受け入れるという姿勢を心がけている方が多くみられ、今後も研修や経験をつんでいきたいという意欲が述べられた。

③他機関との連携

相談を受ける側のスキルとして最も多くあげられたのは、他の専門機関との連携体制である。ただ傾聴することだけでは不十分な場合があり、具体的な対応策が必要な場合に、次にどうつなげていくかが課題としてあげられた。相談内容によってどのように対応していったらよいか、ケースバイケースの対応が求められる

ている現状がある。また、専門機関へつなげた後のフォローについても述べられ、つなげた後に途切れてしまうことが残念であると述べられた。ある所では、専門機関へつないだ後も、「一緒にいるよ、そばで見守っているよ」の姿勢を大切にしているという意見が出され、またある所では、他の専門機関に、受身ではなくこちらから積極的に交流を図っていき、問題が生じてからの連携ではなく、日ごろからの交流の大切さを感じていると述べられていた。

④最近の相談の傾向

また、最近の相談内容の傾向として、ひろばでの親同士のトラブルがいくつかあげられ、そこにどのように関わっていたらよいのかが課題であると述べられていた。親同士をつなげたり仲介したりすることも相談活動のひとつのスキルとして考えていかなければならないようだ。

⑤電話相談

電話相談について、他の業務と同時に行われるため、相談の時間が長くなってしまったときに日常の業務にかなり支障をきたすという現状があるようだ。長くなった場合に途中で電話を切ることもできずに困ってしまったり、電話相談では相手の様子がわかりづらかったり、電話相談の後の様子が気になるが、こちらから連絡できないことなどの課題が提示された。

⑥まとめ

相談の窓口は、日常的なひろばでの関わり、電話相談、グループ相談など、親が選択できるように多種多様なものが求められている。支援者は相談内容によって、ただ話を聴くだけでよいのか、発達上の問題のために専門性を要する相談であるのか、ピアカウンセリングや自助グループ、子育てサークルなどによって解決していく相談なのか、などといった“見極め”が必要とされている。見極めた後

に、コーディネートとフォローをどのように行っていくかが支援者に求められていることが分かった。そして、そのような相談を、気軽に出せる場所や関係作りが、小さな地域の拠点施設に求められているようだ。

(8)支援者の専門性を高めるための研修

支援者の研修を行う上での課題として、自由記述での回答を求めた。結果、「研修の時間と場所と内容」と「研修後のフィードバック」に関しての課題があげられた。

①研修の時間と場所と内容

まず時間に関して、勤務時間終了後の研修では疲労がたまってしまったり、家庭の事情などのために参加できないことが多いようだ。そのため、勤務時間内に研修を行うことが理想的だが、普段の業務に追われて研修時間を持てるゆとりがない現状がある。勤務時間内に研修に参加できるように、ゆとりあるスタッフの体制が課題としてあげられた。

また場所に関しては、研修場所の偏りが指摘された。全国レベルの研修や都内の研修は費用の負担が大きく、地域的な研修では内輪的で発展的ではないという難点がある。発展的であるためにも、研修内容や講師の充実を希求しているが、どんな内容の研修が必要で、どのように講師を依頼するかがよく分からないという現状もあるようだ。

内容については、子育て支援とは複合的であり、保育・育児情報・地域ネットワーク・カウンセリングマインドなど幅広いものが求められている。一方で、子育て支援の専門性がはっきりとつかみづらいために、実際にどのような研修を行えばよいかが明確でないことが指摘された。

②研修後のフィードバック

次に多くあげられたのは、研修後の現場へのフィードバックに関してである。

研修を受けても、それを報告して現場に活かすことにはつながっていない現状があるようだ。まず、研修を受ける人が偏っており、研修を受けている人と受けていない人との意識のズレがでてきてしまっている。支援者全体の共通理解があつてこそ、初めて研修が生きてくることから、伝え合い、学び合いを深めてよりよい実践活動につなげていきたいとの声があがった。そのためにも、研修後の報告を丁寧に行い、現場に活かしていきたいとの抱負も多く述べられた。また、特に保育所内のひろばからは、支援者のみでなく、支援者以外（ボランティア・園長・栄養士など）の人への研修も必要ではないかとの課題が提示された。

Ⅲ 2.

2) 子育て家庭を対象としたアンケート調査

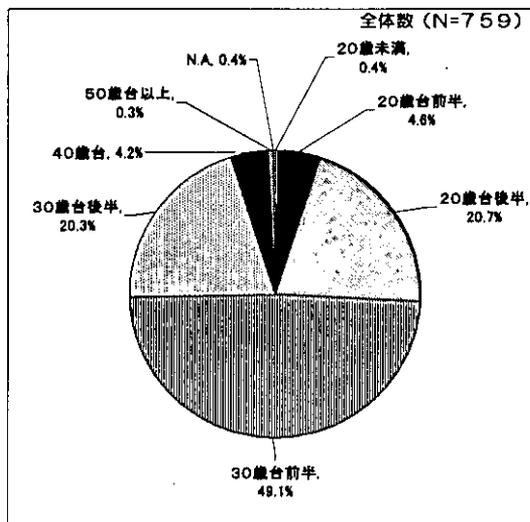
(1) 回答者についての調査結果と考察

① 年齢

30代前半が49.1%と約半数を占め、次いで20代前半と30代後半が約20%であった。20代後半から30代後半の年代層が全体の8割となっている。

50代以上の回答0.3%は、孫の検診を受けに来た者である。

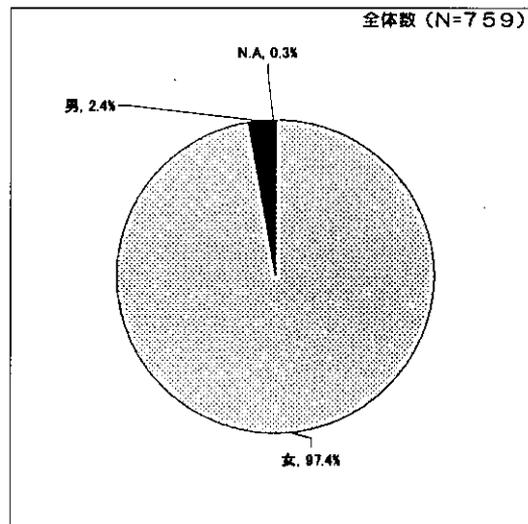
【図表1 年齢】



② 性別

女性が97.4%を占めている。乳幼児の子育てを母親が一手に担っている実態が明らかである。

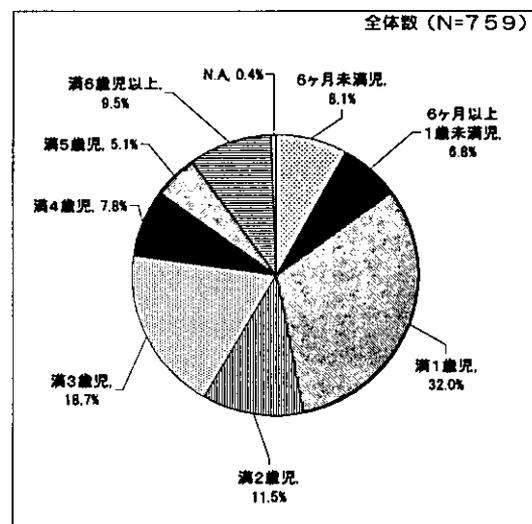
【図表2 性別】



③ 子どもの年齢

きょうだいも含めたすべての子どもの年齢を尋ねた。3歳以下の幼児のいる家庭を対象にした調査であるが、4歳以上の子どもも22.4%存在している。満1歳児が最も多く、満2歳児以下が過半数を占めている。

【図表3 子どもの年齢】



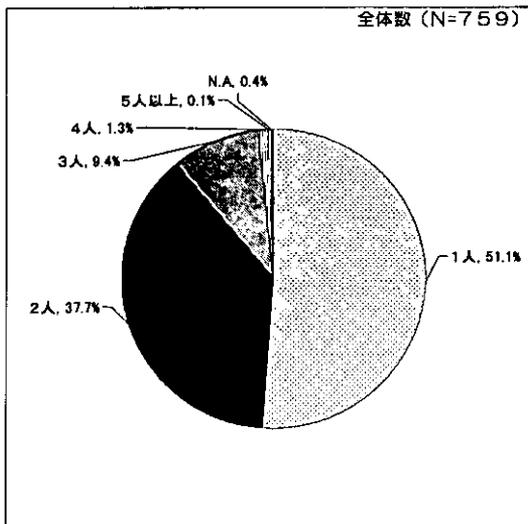
④子どもの人数

育てている子どもの人数を尋ねた。1人と回答した者が51.1%、2人が37.7%で9割近い数である。

調査実施場所によるグループ別に見てみると、ひろばグループは子どもが1人という回答者が62.2%を占め、2人が29.7%となっているのに対し、健診グループは1人が42.5%、2人が43.7%、児童館グループは1人が24.5%、2人が43.7%となっている。ひろばグループにおいては、半数以上が初めての子育てをしている者であることがわかる。

759人の回答者において、複数回答が1,114あり、回答者は、平均で1.47人の子どもを育てていることになる。

【図表4 子どもの人数】

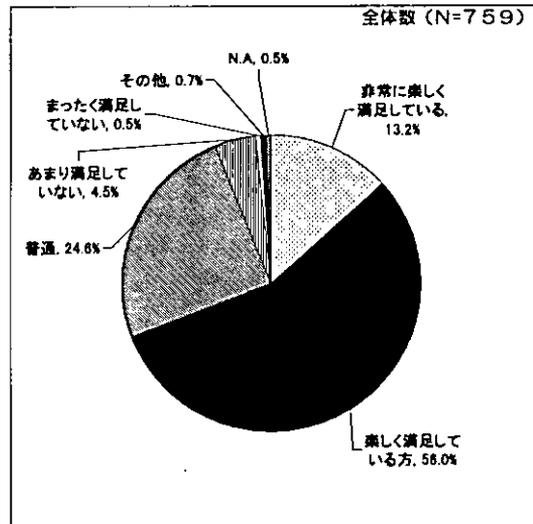


⑤子育てに対する満足度

非常に楽しく満足している13.2%、満足している方56.0%を合わせると7割近くが満足していることになる。しかし、「満足している」との回答を選択しなかった回答者が全体の3割を占めているということでもある。

様々な子育て支援が展開されている現在においても回答者の3割が子育てに対し満足感を持ってない現実を真摯に受け止めるべきではないだろうか。

【図表5 子育てに対する満足度】



⑥ほしい子どもの数

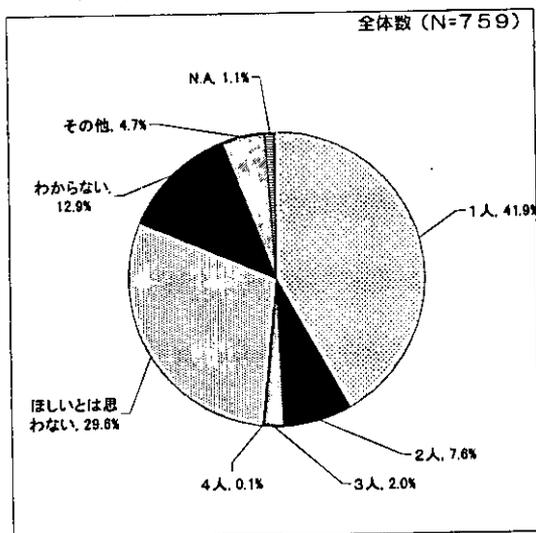
これからさらに子どもがほしいと考えているかどうかを問うものである。

もう1人ほしいと回答した者が41.9%、2人が7.6%となっている。(1) - ④の結果から明らかなように、現在育てている子どもの人数が1人ないし2人と回答した者が多い結果から、さらに子どもがほしいという回答が半数近くあることは理解に易い。しかし、ほしいと思わないという回答も29.6%を占めていることにも注目したい。

ほしい子どもの数に関して、子育ての満足度の違いにより有意差が見られるか分析を試みた。前掲の⑤において子育てに対し「非常に満足している」「楽しく満足している方」を選択した者を満足群、「普通」を含め「あまり満足していない」「まったく満足していない」と回答した者を不満足群として、ほしい子どもの数について χ^2 検定を行なったところ、1%水準で有意差が認められた。子育て満足群においては、ほしい子どもの数が1人ないし2人と回答した者が有意に多い結果であった。また、不満足群においてはほしいとは思わないとの回答が、満足群に比べ有意に多い結果であった。子育てに不満足な状況にあっては、これ以上子どもを欲しいと思わないのは当然のこと

であると思われる。子育てに対する満足感は、さらに子どもを欲しいと思う気持ちに繋がるのではないだろうか。

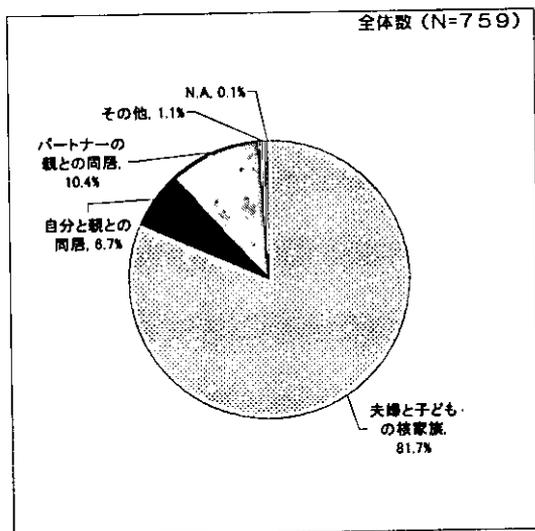
【図表6 ほしい子どもの数】



⑦家族構成

核家族が81.7%。パートナーの親との同居が10.4%、自分の親との同居が6.7%であった。本調査における核家族とは、夫婦（あるいはシングル）と子どもの核家族のことである。親以外に子育てや家事をシェアできるおとなのいない家族で子育てをしている家庭が8割を占めていることが明らかになった。子育て支援の必要性が伺われる結果といえよう。

【図表7 家族構成】



(2) 子育て支援の現状と今後利用したい支援についての結果と考察

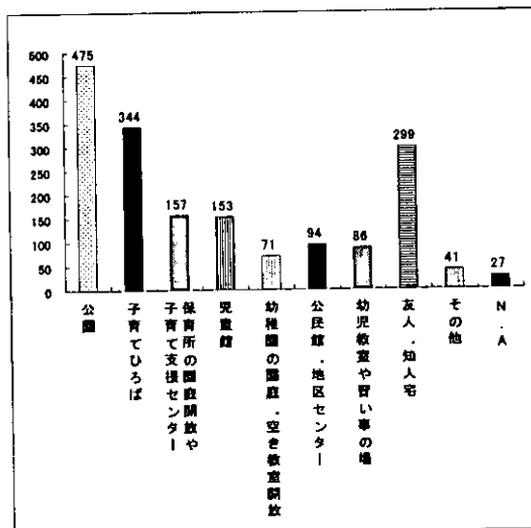
①よく利用している子育てや子育て支援の場について

759人の回答者のうち475人が公園を挙げている。次いで、子育てひろば、友人・知人宅となっている。

ひろばを利用している者と通常の子育て家庭の回答の傾向を比較検討するため、広く一般の子育て家庭が参加する乳幼児健診における回答者と、ひろば利用者の2グループを抽出し比較検討を行なった。ひろばグループと健診グループの利用状況について χ^2 検定を行なった結果、0.1%水準で有意差が見られた。ひろばグループにおいては、子育てひろば、保育所の園開放や子育て支援センター、児童館の利用が有意に多く、健診グループにおいては、公園、公民館・地区センター、友人・知人宅が有意に多い結果であった。

この有意差からは、ひろばグループの回答者は、子育てひろばのみならず、保育所や子育て支援センター、児童館などの子育て支援の場を、健診グループに比べて多く利用していること明らかになった。ひろばグループは、公的な子育て支援を積極的に利用している者が多いとも考えられる。

【図表8 子育てや子育て支援の場】



②よく利用する子育て支援

該当する支援をすべて挙げてもらった。親子が集うひろばを揚げた者が367人で最も多い。全回答者759人のうち、ひろば利用者のグループが374人であることも影響していると思われるが、このひろばグループのうち、親子が集うひろばをよく利用する支援として選択した者は262人である。ひろばグループ以外の回答者であっても、よく利用する子育て支援として親子が集うひろばを選択している者が105人を占めている。健診グループ、児童館グループにおいても、親子が集うひろばは、最も選択が多い回答であった。

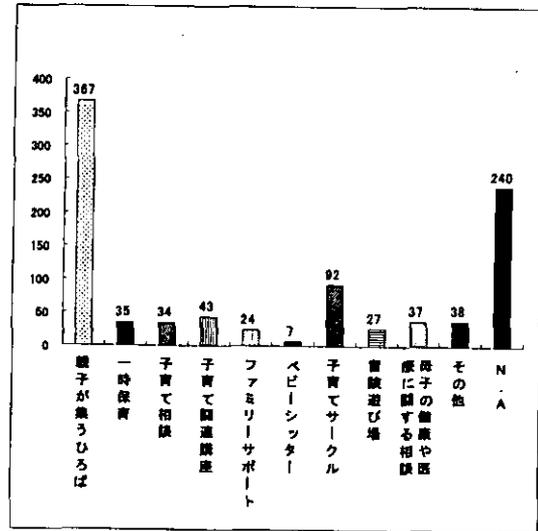
ついでN・Aが240人となっている。これは、「よく利用する子育て支援はない」という選択肢を作らなかったため、どの項目にも印をつけていない回答が含まれているものと思われる。

この項目においても、ひろばグループと健診グループに0.1%水準で有意差が認められる。親子が集うひろば、子育て関連講座においてはひろばグループの利用が有意に多く、一時保育、ファミリーサポートに関しては健診グループの利用が有意に多く見られた。ひろばグループにおいて、よく利用する子育て支援が子育てひろばや子育て関連講座であるということは、子どもと過ごすための場所や学習の機会としての支援の利用が多いと考えられる。

健診グループにおいて一時保育、ファミリーサポートの利用が多いことから、ひろばグループに比べ、子どもを預けるための支援の利用が多いことが伺える。

しかし、実数としての一時保育やファミリーサポートセンターの利用者は759人中それぞれ35人と24人、全回答者の4.6%と3.2%にとどまっている。3歳以下の子どもを育てている家庭にとって子どもを預けるための支援の利用が少ない実態が明らかになった。

【図表9 よく利用する子育て支援】



(2)－①では、よく利用している子育てや子育て支援の場所として該当するものすべての回答を求めたところ1,747の回答があった。平均すると一人当たり2.3箇所を挙げていることになる。しかし、よく利用する子育て支援に関する質問では回答の状況は違う。よく利用する子育て支援10項目のうち、該当するものすべての回答を求めたところ、944の回答があり、平均すると一人当たり1.2項目を挙げていることになる。これは、親子が集うひろばに比べ他の子育て支援の利用はあまり多くないという実態を示すものではないだろうか。

③子育てに関する相談相手

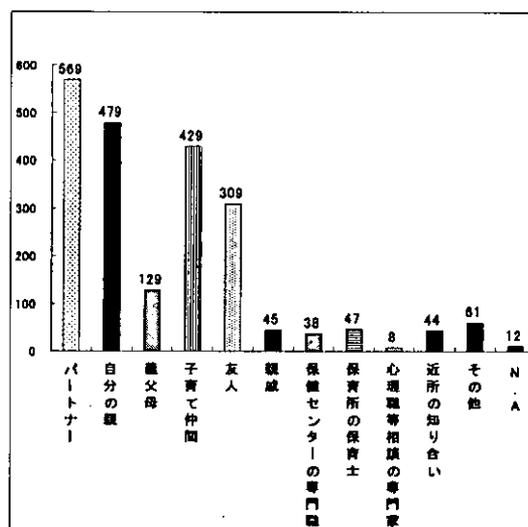
子育てに関する相談相手で最も多かったのは、パートナーであり、回答者の97.4%が女性であることから父親であることが明らかである。次いで自分の親、子育て仲間を半数以上の回答者が挙げている。友人を挙げた者も309人おり、子育て仲間や友人は子育てに関する相談相手として大きな割合を占めていることがわかる。

保育所の保育士、保健センターの専門職を挙げた者は47人と38人で全回答者の6%、5%となっている。心理職等相談の専門家と回答した者は8人で全体の1%であった。相談の専門家自体がまだ一般的ではないことも大きく影響している結果であると思われる。保育士や専門職を挙げる者も数パーセントである実態は、「子育て相談」のあり方を示唆するものではないだろうか。乳幼児を育てている多くの親にとっては、専門的な相談機関がすぐに必要となるのではなく、相談とは言えないような日常の小さな不安や質問を相談する相手が必要なのである。

改まった「相談」として話を聞いてもらうほどのことではない日々の小さな育児不安を軽減するためにも子育て仲間が大切であり、ひろばにおいての子育て仲間作りの必要性は高いと考えられる。

ひろばグループと健診グループにおいて χ^2 検定を行なった結果、0.1%水準で有意差が見られた。ひろばグループの相談相手として有意に多いのは、子育て仲間の他、保健センターの専門職、心理職等相談の専門家である。健診グループに有意に多く見られたのは、保育所の保育士、自分の親である。ひろばグループは子育てひろばを利用することにより、子育て仲間に気軽に相談することが可能なため有意差が見られたものと思われる。また、保健センターの専門職や心理職等相談の専門家が有意に多いことは、ひろばによって、相談体制が整っている場合や、相談機関の紹介がある場合が考えられる。また、健診グループにおいて、保育所の保育士が有意に多かったことは、健診グループの回答者の中には、子どもが保育所に在籍している者も少なからず含まれていることが影響しているのではないだろうか。

【図表 10 子育てに関する相談相手】

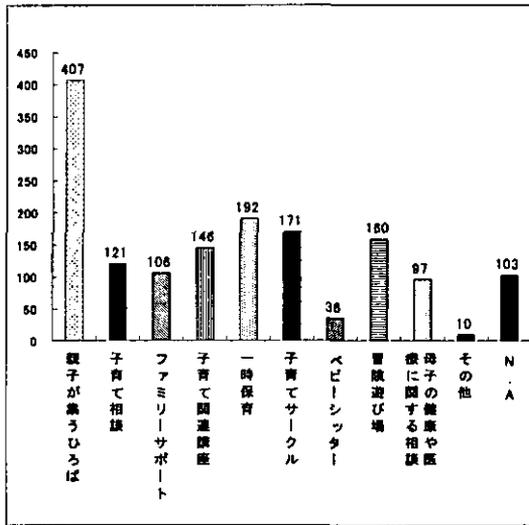


④今後、利用したい子育て支援についてぜひ利用したいと考えている子育て支援について、該当するものすべてを選択してもらった。親子が集うひろばを選択した者は過半数を超えている。このうち、現在ひろばを利用していると思われる、ひろばグループの回答者242人を除いても165人の回答者が、親子が集うひろばをぜひ利用したいと回答していることが明らかである。

次いで回答が多い支援は、一時保育、子育てサークル、冒険遊び場の順となっている。親子が集うひろば、子育てサークル、冒険遊び場、子育て関連講座などは、回答者である親が子どもとより良く過ごすための支援である。親子がともに過ごすための支援に対するニーズが高いことを示す結果であると言えよう。

また、どの項目においても(2)-②のよく利用する子育て支援の回答に比べ今後利用したいと答える者が多くなっていることから、子育て支援に対するニーズの高さが伺われる。特に一時保育や冒険遊び場、子育て関連講座については、現在利用してはいないが利用したい支援としてニーズが高いと考えられる。この今後利用したい子育て支援の傾向についてはひろばグループ、健診グループにおいて有意差は見られなかった。

【図表 11 今後利用したい子育て支援】

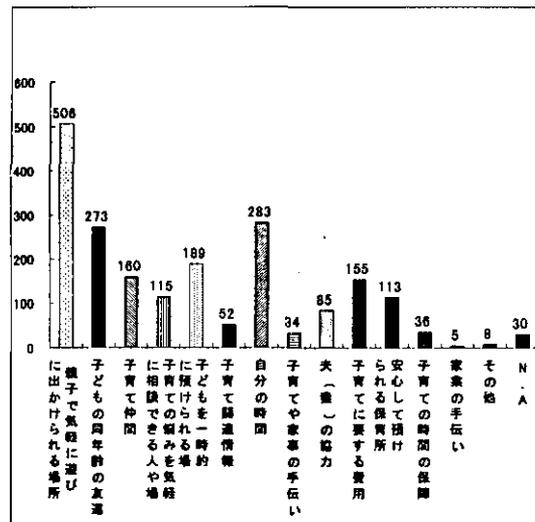


⑤子育てを行う上で、特にほしいと思っているもの

3つ以内で回答を得た。親子で気軽に出かけられる場所を挙げた者が759人中506人と66.7%を占めている。次いで特に欲しいと思うものとして、自分の時間を挙げる者が、283人で37.3%である。また子どもの友達がほしいとの回答も多い。これらのことから、親子が日中を過ごすための場に対する必要性が高いことがわかる。

また、自分の時間がほしいとの回答も多いことから、実際には、子育てにおいて自分のための時間が思うように取れない様子が伺われる。

【図表 12 子育てを行う上でほしいもの】



(3)子どもを預かる(預けあう)ことについての結果と考察

①子どもを預ける必要があるとき、誰によく預けるか

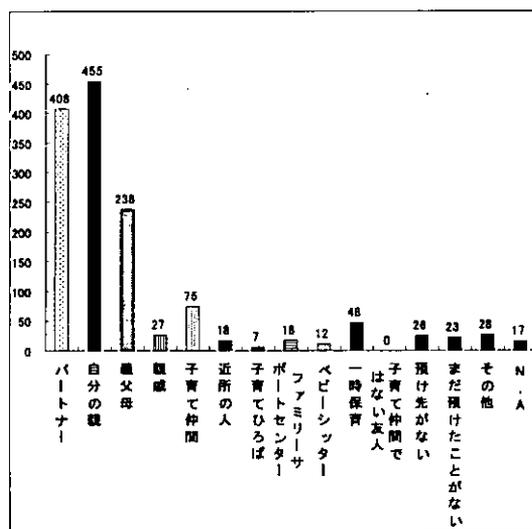
気軽に預けられる人や場として該当するものすべてを選択してもらった。自分の親455人、パートナー408人、義父母238人と身内に預けている回答者が多い。以下、子育て仲間が回答者の約10%、他の項目は数%以下であった。

気軽に預けられる先を問うた結果であることから、身内を選択する回答が多く、ファミリーサポートセンターや一時保育

等の選択が極度に少なかったとも推察される。

また、身内である上位3つの項目において、自分の親という回答が夫を上回り、最も多く回答を得ていることに注目したい。

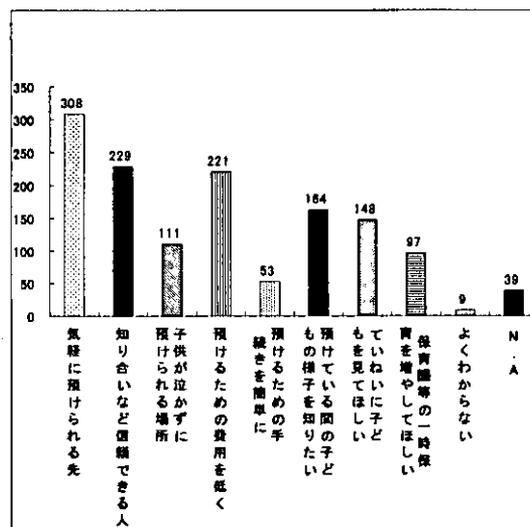
【図表 13 子どもの預け先】



②子どもを預ける人や場所に対して望むこと

2つ以内で回答を得た。気軽に預けられる先との回答が最も多く308人。信頼できる人に預けたい229人、預けるための費用を低く抑えたいが221人となっている。子育て家庭においては、気軽に預けられる先自体が望まれている実態が明らかになった。また、知り合いなど、信頼できる人に預けたい、預けている間の子どもの様子が知りたい、ていねいに子どもを見てほしいというように、子どもを預かる先の子どもへの対応、つまり保育の質に対して望む回答も多く寄せられている。

【図表 14 預ける人や場所に望むこと】



(3)－①の回答において、身内以外の子どもの預け先を選択した回答が極端に少ない結果であったことから、子育て家庭においてはまず、安心して子どもを託すことができる預け先が無い状況にあることが伺われる。また、預けるための費用を低く抑えたいという回答が29.1%と3割近くを占めている。ベビーシッターをはじめ、一時保育やファミリーサポートセンターも有料であり、子育て家庭にとっては費用がかかる預け先を気軽に利用することは難しいと推察される。これらのことが、(3)－①における公的な預け先の利用が低い原因とも考えられるのではないだろうか。

また、預けている間の子どもの様子や丁寧に見てもらうことに気を配る回答が、手続きの簡略化や一時保育の増加に対する希望よりも多い結果であったことは、預け先の保育の質の高さを求める親が多いことを示すものであろう。現在実施されている一時保育やファミリーサポートセンターは、実際に預ける必要ができるまで、親にとってはなじみの薄い場所である。また、保育者の人となりもわからない状態で子どもを託すことになる。知り合いなど信頼できる人に預けたいという親のニーズを考えると、現在のような公的な預け先のシステムは一考を要する

のではないだろうか。日頃から親子が親しんでいる場所や人が、子どもの預け先となり得るような子育て支援のあり方が求められているのではないだろうか。

(4) 父親の子育て参加についての結果と考察

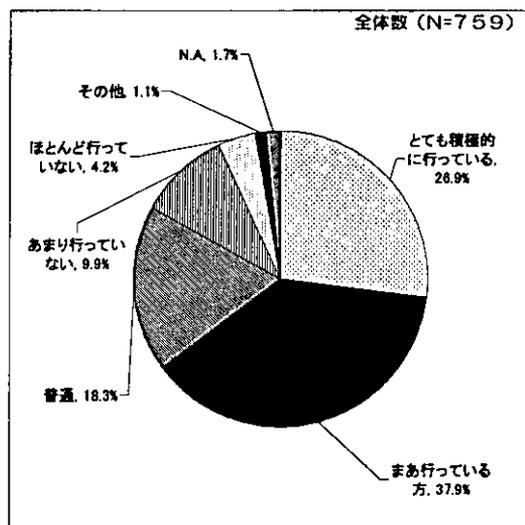
① 子どもの父親は、子育てや家事を積極的に行っていると感じるかどうか

回答者である母親が父親をどう捉えているかを尋ねた。とても積極的に行なっている 26.9%、まあ行なっている 37.9% を合わせ、回答者の 60% 以上が父親は積極的に子育てや家事を行っていると感じていることが明らかになった。

(1) - ⑤ において子育てに対し「非常に満足している」「楽しく満足している方」を選択した者を満足群、普通を含め「あまり満足していない」「まったく満足していない」と回答した者を不満足群として、両群において、父親の子育てや家事を積極的に行なっていると感じるかについて χ^2 検定を行なったところ、1% 水準で有意差が認められた。満足群においては、父親は子育てや家事を積極的に行なっていると感じているとの回答が有意に多く、不満足群においては、あまり行なっていないと感じているとの回答が有意に多い結果であった。

父親の子育て参加の度合いだけが、子育ての満足感に影響を与えているわけではないが、母親が感じる満足感に少なからずとも影響を与えていることがわかった。このことから、父親が子育てに参加するための支援は必要性の高いものであると考えられる。

【図表 15 父親の子育てや家事】



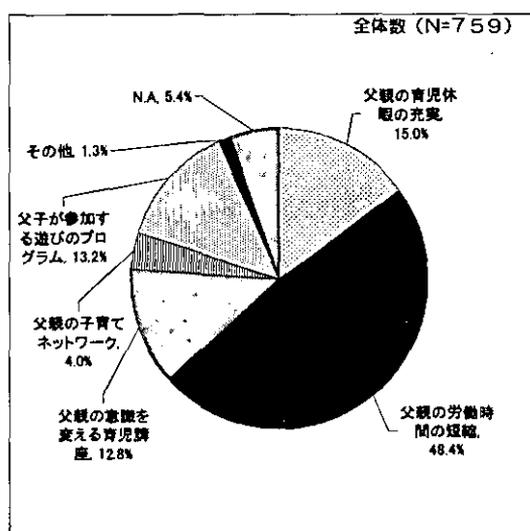
② 父親が子育てに参加するために特に必要と思われるもの

特に必要と思われるもの 1 つを選択し回答を得たところ、父親の労働時間の短縮を求める回答が最も多い結果となった。次いで育児休暇の充実、父子が参加する遊びのプログラム、父親の意識を変える育児講座となっている。(4) - ① では「父親は子育てや家事への取り組みをほぼ積極的に行なっている」との回答が多いものの、最も必要な支援として労働時間の短縮が挙げられる結果からは、父親が子育てに費やす時間が十分ではない現状がうかがえる。

(4) - ① で、「とても積極的」「まあ行なっている」と回答した者を子育て積極群とし、普通を含め、父親は子育てを積極的に行なってはいないと感じる回答者を非積極群とした。両群において、父親が子育てに参加するために必要と感じる支援について χ^2 検定を行なったところ、0.1% 水準で有意差が見られた。父親の育児休暇の充実が必要だとする回答と、父親の子育てネットワークが必要だとする回答は、積極群に有意に多く、父親の意識を変える育児講座が必要だとする回答は非積極群に有意に多かった。積極群では、父親は父親独自の子育てネットワークを活用したり、育児休暇を活用したり

する可能性があると考えられているようである。母親同様の子育ての担い手としての父親に対する、具体的な支援が求められていると思われる。しかし非積極群では、まずは父親の意識から変える必要を感じており、そのための支援が求められていると言えよう。

【図表 16 父親の子育てのための支援】



(5)小・中・高校・大学生が子どもとかかわることについての結果と考察

①子育ての研修を受けた中学・高校・大学生等の受け入れ家庭となってもよいか
 研修を受けた学生等があなたの家庭に一日入って、子どもと遊んだり、家事を手伝ってくれるような機会があれば受け入れ家庭になるかどうかを尋ねたものである。

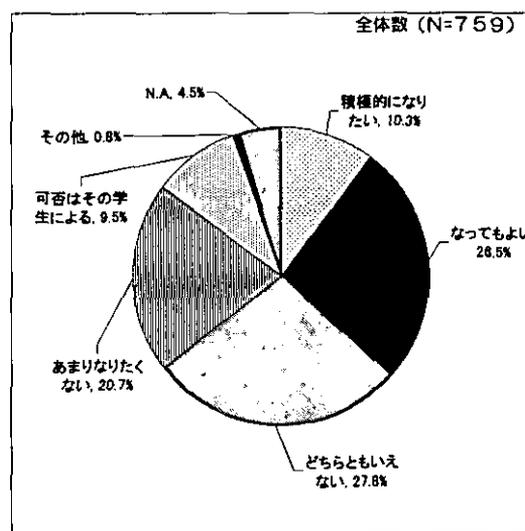
積極的にになりたい、なっても良いと回答した者は 36.8%。どちらともいえないとの回答が 27.8%、あまりなりたくないが 20.7%であった。日本では、中・高・大学生が、きょうだいや身内以外の乳幼児とかかわること自体がまだ一般的ではないこと、また子育て家庭に第三者が訪問し家事や育児を手伝うという習慣もないことから、回答が分かれたものと考えられる。

ひろばグループと健診グループにおい

て χ^2 検定を行なったところ、0.1%水準で有意差が見られた。ひろばグループでは積極的に受け入れ先になりたいと回答した者が有意に多く、あまりなりたくないとの回答は、健診グループにおいて有意に多い結果となっている。これは、ひろばにおいて、実際に大学生がスタッフとして活動していることが大きく回答に影響を与えているものと思われる。学生スタッフを日頃から身近に感じているひろば利用者の中には、積極的に学生の受け入れ先になってもよいと回答する者が多いと思われる。

親になる前の若い世代が、子育ての研修を受けたり、子育て家庭を訪問することは、次世代の子育て力を育むためにも有効な学びであると思われる。このような、次世代育成に子育て家庭が積極的にかかわるために、ひろばが、子どもや子育て家庭と様々な世代が交流するための場所でありコーディネーターの役割を担うことができるのではないだろうか。

【図表 17 学生の受け入れ家庭】



②中・高・大学生のボランティアベビーシッターの利用について

前掲①の設問と同様に学生等に、ボランティアでベビーシッターとして数時間、家庭等で子どもを預かってもらえと